

教育書三

上越教育大學教授

新井郁男

私は国語の授業が苦手であつた
が、本書を読んで、その原因がよ
くわかつたような気がする。著者

によれば、「学校での”読み”に関する現在の教育は、一般的に言ってかなり憂慮すべき状態にある」

これは私も、國語が苦手だった
という自分の経験に照らし、また、

多くの授業を参観しながら感じて

西林克彦著
『「わかる」のしくみ――「わかつたつもり」からの脱出』

いたことであるが、本書を読んで、それがなぜであるかを納得したのである。

著者は、憂慮すべき状態の問題には、「文章をよく読むための指導がなされていない」問題と、「指導してはいけないことが、指導されている」という問題の二つがある、と言つてゐる。

第一の問題は、「部分間の関連

著者はこれを「文章内主義」と呼んでいるが、これを脱出するには「新たな文脈を設定したり、部分間の矛盾で”わからない”状態を意識的に作り出したりする作業によって」である、と言う。

著者には「間違いたらけの学習論」(新曜社)という著書もあるが、本書はその統編ともいうべきものであるので、併せて読まれることを薦めたい。

なお、著者は宮城教育大学教授で、教育心理学、特に、学習、教授、授業過程が専門。著書として

は、「授業」(共編著、日本標準)、「教育実践のための教育心理学」(共著、新曜社)、「発達と学習」(共著、学文社)もある。

う推進を提案したいと述べている。
本書は、以上の問題を具体的な
事例を使った実験授業の結果をふ
まえて説明しているので、「なる
ほど」とよくわかる。

さらに重要な点は、以上のよう

な問題は、原理的には国語教育についてだけでなく、他の領域でも通用すると指摘されていることである。ポバーの科学論も引き合い

に出されている。この意味において、本書は単に国語科を担当する教師だけでなく、他の教科を担当する者にも読んでもらいたい。

著者には「間違いだらけの学問論」(新曜社)という著書もあるが、本書はその続編ともいいうべきものであるので、併せて読まれることを薦めたい。

なお、著者は宮城教育大学教授で、教育心理学、特に、学習、教授、学習過程が専門。著書としては、「授業」(共編著、日本標準社)、「教育実践のための教育心理学」(共著、新曜社)、「発達と学習」(共著、学文社)もある。

われわれは「わかったつもり」でいることが多いが、教育はその「つもり」に搖さぶりをかけて、より深い理解に児童生徒を引き込んでいく働きかけでなくてはならない。しかし、著者も指摘するように、現実は必ずしもそうなつてない。この状況からの脱出のきっかけを、本書は与えてくれるで